

大和魂の語は前の大戦末期に國民學校、中學校（舊制）にて屢々耳にすと雖も、その意味する所は常に一身を國に捧げて悔いなしとするものにてありけり。その故にてやありけむ、敗戦後は絶えて聞くこともなく半世紀を過ぎたり。文語の苑の初期事業として、電網空間への文語発信あり、その中今日までつづきをりける「メルマガ」ありて、小生「愛國百人一首」の解説を毎月上架せり。

平成二十七年三月に吉田松陰の

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし日本魂

を解説せるありて、「大和魂」にも言及せり。茲にては本居宣長の「大和ごころ」との關聯を陳べたる上、本邦初出とせらるゝ源氏物語少女の卷

なほ才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるゝ方も強う侍らめ

（やはり、漢學をしつかり學んでこそ、日本固有の慣習や情緒を重んずる實務の面でも力を發揮できるだらう）を引用し、松陰が（漢學の素養十分な上に佐久間象山の門に學び博く世界の氣勢に目を向けてみましたから、「日本魂」の意味を紫式部や宣長と共有してゐた筈）と述ぶ。

斯くして「大和魂」は繩文時代より長き歴史を通じて育み來たれる日本固有の文化、情緒にして、これに外來文化の粹を吸収し、所謂和魂漢才、和魂洋才にて世に處するは我が國獨特の文化なり。然れば上古より漢土は易姓革命、和は萬世一系とし、律令制度も漢土の刑罰を導入せざりしなど、多様性を堅持し來たれるも亦史實なり。和魂洋才の今日「洋」への盲従あるべからず。

この和の意聖徳太子に十七條憲法第一條に

以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。是以、或不順君父。乍違于鄰里。然上和下睦、

諧於論事、則理自通。何事不成。

とある原漢文に對し、一般に「和を以て貴しと爲す」と訓むも、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晉校注の岩波文庫版「日本書紀」にては「やはらぐをもてたふとしとなす」とあり。この條を愚考するに、「和」の字ニヶ所に出づれば共に同じ意に解すべく、後の「上和」には「下睦び」の受けあり、「かみやはらぎ」と訓むが至當なれば、初めの「以和」は「やはらぐをもて」と訓むべく、次の「人皆有黨」以下徒黨を組み互に激しく言合ひするを戒むる文言の理解容易からむ。巷説を採らざる所以なり。

愈々八日後には皇太子徳仁親王殿下踐祚なされ、年號令和と改る。出典の萬葉集にては「風和」即ち風和む又はやはらぐの意なり。これを受けて外務省は英譯を beautiful harmony とす。上述の和魂にも「にき（み）たま」の訓みあり、穩和、調和の靈魂を表す。文化の多様性尊重の時代に於て、日本文化の溫和性、調和性こそ世界への有力理念たるべけれ。

（平成三十一年四月二十三日）